

生涯にわたって古典に親しむための授業開発

— 『枕草子』類聚的章段における創作活動を手がかりとして—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 有賀元信

1. 研究の背景と目的

高等学校卒業後、古典に触れたという方はどの程度いるであろうか。少し立ち止まって考えてみても、ほとんどの方が高等学校での学びを最後に古典と触れることはないのではないかと。そういった問題意識から研究を進めていった。

研究についての報告を始める前にタイトルに触れておきたい。「生涯にわたって」という文言から検討する。自分からなにかに触れる、なにかをやるというとき、「なにか」に入るのは、基本的に好きなもの、興味があるものである。当然、嫌いなものに対して自分の時間を割こうとは思わない。時間があつたときに、少しでも古典に関するものに触れてみようかという気持ちを持ち続けること、これが本研究における「生涯にわたって」の意味であり、積極的に読み続けなければならないということは意味しない。「親しむ」ということだが、なにげないときに触れうるという程度の広い意味を指す。これは、後々見ていくが、古典嫌いと思われる生徒が7割以上いると考えられるため、親しみの指す範囲を狭めてしまうと誰も親しんでいない状態になりかねないためである。

これらを踏まえて、本研究は、高校卒業後、古典に触れる素地を作ることを目指した。具体的には、何気なく古典を読んでもいい、触れてみてもいいかなと思えるような関係作りを目指したということである。上記を踏まえて、以下、研究の背景を見ていく。

国立教育政策研究所の調査^(注1)では、古文・漢文を好き、どちらかといえば好きという人は、それぞれ合計23.1%、24.8%となっている。また、野田千裕・若杉祥太他^(注2)が実施したアンケートにおいて、古典科目が得意、どちらかと

いえば得意と回答した生徒は、20～30%ほどしかいない。これらのデータからも古典に対する否定的なまなざしが根強いことがわかる。やはり、こうした古典嫌が多い中で古典が急に好きになったり、生涯にわたって積極的に古典を読んだり、触れたりするという状況は生まれがたい。

それでは、こうした問題に対してどのような改善案が出され、また、実践がなされてきたのか。以下、確認していく。

国立教育政策研究所は、先の調査をうけて教科・科目別分析と改善点を出している。その内容を要約して示す。古典を味わうために基礎的な知識・技能を教え込むような授業が行われてきたが、その指導のためにかえって古典嫌いを生みだしてしまった。そこで、古典の指導にあたっては、当時の人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業実践によって、古典に対する関心・意欲を高める。その後、古典理解のための基礎的な知識技能を身につけさせていくのが理想的な指導であると述べている。上の改善案からは、古典の人のものの見方、感じ方、考え方を広げたり、深めたりすることが古典嫌いを出さないための要となると考えられていることがわかる。ここからは、古典が今にもつながってくるという感覚の大切さが見取れるはずである。

いま、簡単にではあるが、理想的な指導とされるものを見た。それでは、実際にどのような実践が行われてきたのか。1つ目に見るのは、中野貴文の実践^(注3)である。

中野は、これまでの古典の授業の在り方について以下のように述べる。「一つの正確な解釈を追及する原文翻訳中心の授業は、学習者の古

典嫌いを増やすばかりであり、事実、古典を自身に関わる問題として学ぼうとする主体性は損なわれ続けている。」こうした状況を改善していくためには、「個々の学習者の生活感覚や想像力を尊重し、古典学習へのモチベーションを高めることで、古典の専門的知識や現代とは異なる価値観を学ぶ動機づけにできる、新しい古典授業が要求される」とし、ドラマ教育（対象作品を各々鑑賞した学習者が、新たに脚本を想像して演じるもの）を提案している。この実践で特に注目されるのは、生徒が古典への関心を高め、知的好奇心を刺激されるような創作活動を打ち出している点である。

2つ目の実践は、一瀬大樹^(注4)のものである。一瀬は、「現代文と古典を同時に扱うことで、生徒たちは「今」と「昔」という時代の同質性と異質性に、「言葉を通して」気づくことができる。」と指摘し、「古典だけを扱い、古典を自分たちから遠いものとして敬遠する「古典嫌い」の生徒を生み出さないことにもつなげることができる」として、「今」と「昔」を同時に学習で扱うことの意義を見いだしている。この実践で特に注目されるのは、生徒が現代と古典とのつながりを感じられるように配慮した点である。

平成30年度版の高等学校学習指導要領、古典探究の目標に「言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。」（傍線は引用者）と掲げられている。先の2つの実践はこの傍線部を達成するための実践とも言えるであろう。

いま見てきたように古典への見方、感じ方、考え方を現代と繋げて理解させる試みが改善案でも説かれ、先行実践でも行われてきた。

これらの実践は、古典に親しみをもたせることに一定の効果はあるものの、古典の側からだけ現代を見つめる活動では、生徒たちと馴染みのない感覚から出発せざるをえず、距離を感じてしまいやすいという側面がある。そこで、現代の感覚から古典を照らし出してみる活動を

することによって、古典と私たちの距離を縮められるのではないかと考え、研究の目的を設定した。それは、「創作活動を軸にして、古典と現代を往還しながら古典を好きになってもらえるような授業を開発する」である。

2. 実践報告

本研究の背景と目的は以上見てきたとおりであるが、ここからは、具体的にどのような授業を行ったかを報告する。

(1) 概要

- ・対象校 山梨県立高等学校
- ・期間 2023年10月 全4時間
- ・対象 2学年1クラス (25名)
- ・教材 『枕草子』「すさまじきもの」(東京書籍『精選古典探究 古文編』)
- ・単元目標「随筆の内容を自分と関連付けながら、ものの見方、感じ方、考え方を広げる」

① 教材とその取り扱い

今回扱ったのは、清少納言が書いた『枕草子』の一節である「すさまじきもの」という標題がつけられた章段である。これは、一般的に類聚的章段(ものづくし)と呼ばれている。類聚的章段(ものづくし)とは、「○○は」「○○もの」という標題を持ち、その標題に適合する対象を作者の考えや好みにあわせて集めた章段を指す。例えば「木の花は～」、「すさまじきもの」、「うつくしきもの」などがこれにあたる。

この章段の第一段落は、「昼ほゆる犬、春の網代。三、四月の紅梅の衣。」などから始まる。そのため、作品が描かれた当時の季節感を知らないどどのような点が「すさまじきもの」なのかよくわからない。教材として第一段落を扱う際には、古典との距離を遠ざけないための工夫が求められるであろう。現代の感覚と馴染みが薄い冒頭は、授業のなかで「すさまじ」という語のもとと持つ語感を大切にし、時期的に「期待はずれな感じ」で「興奮めな様子」が「すさまじきもの」というように集められたと説明して、古典との距離を遠ざけないように気をつけた。そのような工夫を経て「生涯にわたって古

典に親しむ素地が徐々に形成されると考える。

また、これまで小学校、中学校、高等学校においては、詩や劇、落語などの教材をもとに翻案や創作をしていく活動が展開されてきた。特に高等学校においては、漢詩や現代詩を創作することが主に見られるものの、これらの活動は、難度が高く、手軽にかつ気軽にできるものではないと思われる。そこで、中学校でも行われている自分流「ものづくし」という言語活動を創作の一環として位置づけることで、上記の創作活動のハードルを下げ、古典に親しむことができると考えた。

(2) 全体計画

全体計画は以下の通りである。

第1次 (1時間目)

- ・『枕草子』「すさまじきもの」の文学史的事項の整理。
- ・事前アンケート

第2次 (2、3時間目)

- ・『枕草子』「すさまじきもの」現代語訳と文法の確認
- ・学習の手引きを用いた内容理解

第3次 (4時間目)

- ・現代版「すさまじきもの」を作ろう
- ・古典の世界における「興醒めなもの」を現代の感覚から指摘しよう
- ・事後アンケート

(3) 授業の詳細

第1次と第2次は、実習校と相談のうえ、主に内容理解に重点を置いた授業を行った。ここでは、本研究に直接的に関わる第3次の授業の詳細を見ていくことにしたい。

・第3次 (4時間目)

第3次の授業は、以下の3つを授業の目標として設定して行った。

- ①古典の中に現代とつながる感覚を発見したり、古典の世界について現代の感覚から捉え直したりすることで親しみを深める。
- ②平安時代の見方・感じ方・考え方を通して現代を見てみることで、これまで出会った事象に新しい側面を見出せる。
- ③『枕草子』の作品としての理解を深める。

特に清少納言は読み手の貴族を意識して、笑いを誘っていたという方向性で理解を深める(注5)。

・ワークシートについて

これらの目標をおさえ、授業内では、創作活動として「清少納言の『すさまじきもの』観から現代の『すさまじきもの』を考えよう」という活動と古典(古文・漢文)の世界で『興醒めなもの』を考えてみよう」という2つの活動を実施した。その後、生徒間で完成したワークシートを共有し、事後アンケートに回答してもらった。

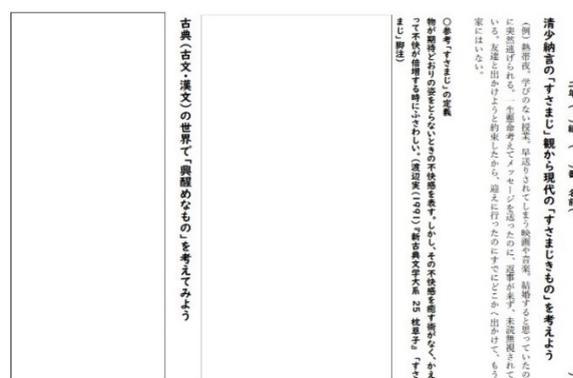


図1 第3次使用ワークシート

創作活動として1つ目に挙げた活動は、実際に言語活動として教科書に記載がある。一方で2つ目に挙げた古典から得た感覚を現代の私たちが引き受けたうえで再び古典の世界に戻り、私たちの「興醒め」と結びつける活動はおそらく初の試みだと考えている。こうした現代の感覚と古典の感覚の往還によって、生徒たちはもちろん、私たち現代人と古典との距離感も近づくのではないかと。

これらの活動で生み出されたアイデアを以下に挙げる。まずは、問一の清少納言の「すさまじきもの」観から現代の「すさまじきもの」を考えよう、に対する答えである。次に挙げてあるのが、問二の古典(古文・漢文)の世界で「興醒めなもの」を考えてみようへの解答である。問二の解答の際には、国語便覧や教科書を見るように適宜指示をした。

問一

- ・花見中の雨
- ・午前3時に鳴るアラーム
- ・出かける日に限って現れるむくみ
- ・風通しの良いダウンジャケット
- ・盛れないプリ機
- ・絶対いけると周りからもてはやされていて、頑張ったのに振られた学園祭
- ・インスタのストーリーは見ているのに LINE 返さないやつ
- ・結末があいまいなドラマ など

問二

- ・妻問婚
- ・一夫多妻制
- ・身分格差
- ・方違へにいかなければいけないこと。
- ・重くて暑そうな十二単
- ・貝合
- ・男と女があまりに極端に分かれていること。
- ・女の家をのぞき見る。 など

上記は複数人から出されたものをまとめたものである。問一の解答からは、「すさまじ」の感覚を正確に捉えて自分なりの「すさまじきもの」を記述していることがわかる。問二の解答からも、「興醒め」という過去から通じる現代の感覚から古典の世界における「興醒めなもの」を記述できていることがわかる。

創作物の共有時においては、ワークシートを自分の席に置いたままで周りの人の作品を生徒が見て回るようにした。その際、生徒からは、「あー！確かに」という声があがったり、笑い楽しんだりする姿が見とれた。これは考察というよりも感想であるが、成果物の共有によって、新たな気づきや楽しみがあることを実感している様子が見てとれる。生涯にわたってこういった共有の輪を持っていくと、より古典への親しみが増すのではないだろうか。

3. アンケートの結果と分析

(1) アンケートの結果

以上で研究の背景と目的、実際の授業実践の様子を確認してきた。ここからは、生徒が回答したアンケートについて見ていく。

実習校の生徒が古典を好きか嫌いか、得意か不得意かを訊いたアンケートの結果からである。これは、事前アンケートのみの質問項目である。古典（古文・漢文）を好き・どちらかといえば好きだと答えた人数は24人中16人であり、また、得意・どちらかといえば得意だと答えた人数は13人で、不得意・どちらかといえば不得意だと答えたのが11人であった。好きと答えたうちの4人が不得意・それほど得意ではないと回答している。

次に本研究に最も関わるアンケート項目である「**高校卒業後も古典作品（古文・漢文）を読みたいと思いますか？理由も含めて記述してください。**」に対する回答結果を見ていく。

事前アンケートで高校卒業後も古典（古文・漢文）を読みたいとした生徒の数は、24人中の14人であった。大まかな理由は、「日本の文化を知ることができる。」「原文で読むのは難しいが、現代語訳や古典作品の考察であればおもしろそう。」「今につながる。」などがあつた。

事前アンケートで高校卒業後は古典（古文・漢文）を読みたくないとした生徒の数は、24人中10人であった。大まかに理由を見てみると、「将来に関係がない。」「昔に興味がない。」「時間がない。」「読書をしない。」「もっと楽しいものがある。」「役に立たない。」「触れる機会がない。」「読みづらい。」などが挙げられた。

事後アンケートで高校卒業後は古典（古文・漢文）を読みたいとした生徒の数は、24人中19人であった。

事後アンケートで高校卒業後は古典（古文・漢文）を読みたくないとした生徒の数は、24人中5人であった。

以下には、「読みたい」→「読みたい」と変化しなかった生徒の回答、「読みたい」→「読みたい」と変化した生徒の回答、「読みたい」→「読みたい」と変化しなかった生徒

の回答を挙げる（後者の2つは全回答である）。

表1

	読みたい（事前）	読みたい（事後）
1	有名な作品は読みたいと思う。幅広い知識を身につけることは良いことで、人生の教科書に成り得る作品もあるから。人生における糧になると思う。	読んでみたいと思う。昔の時代背景や慣習、考え方を知ること、現代にはない新しい生き方、考え方を知ることができると思うから。幅広い考えにつながると思う。
2	原文ではなく現代語訳で読みたいと思う。古文は話自体は面白いが、原文を読むのは大変なため。	論語や日本書紀や古事記などの有名な物は読みたい。古典作品は昔の風俗について細かく書かれているし、歴史や思想に通じる部分もあるため。
3	原文から読むのはめんどくさいので読みたくなけれど、故事成語の成り立ちとかが気になったら読んでみてもいいかなと思う。	今でも共感できるような、ギャグ的でおもしろい作品は、読んでいて楽しくねむくならないので読んでみたい。
4	読みたい。書道で作品を書くときに、中国の古典を臨書することが多いが、自分が何を書いているか分からないことがよくあるから意味を分かって書けるようになりたいため。	読みたい。現代にはない感覚があれば、共感できることもあって、現代の小説ばかり読んでいるときに、不意に読みたくなるから。漢文は、書道で作品を書いているときに、どんなことが

		書いてあるか分かるようになりたいから。
--	--	---------------------

表2

	読みたくない（事前）	読みたい（事後）
1	日常生活で使わないので、読みたいと思わない。漢文は、熟語などの語源が学べることもあるので役に立ちそうだった。	教訓としての作品は読んでもおもしろそうだと思う。
2	思わない。読みづらいから。	読みたいとは思わないが、現代語訳された文を読みたい。古典作品にも「こういう状況あったな」と思えば、楽しかったかなと思った。
3	自分で読もうとは思わないと思う。あまり好きではないから。	たまには読みたい。面白くてオチがある話や現代につながる考えや教訓が語られる話が多く、今の小説とかにはない面白さがあるから。
4	日常であまり古典作品に触れることがなく、あまり読みたいとは思わない。	あまり読む機会はないと思うが、古典の作品が話題になれば、その作品は読みたいと思った。
5	特に思わない。興味はないので、他のことに時間をかけたと思うから。	それは特に思わない。おもしろいものだったらちよっと気になる。

表3

	読みたくない (事前)	読みたくない (事後)
1	読まないと思う。自分の将来的にあまり関係がないと思うから。	自分の職業を考慮すると、あまり関連がないので読みたいとは思わないと思う。
2	自力で読み取ることが難しいので、思わない。普段から読書をしないので、その時間を確保できないと思う。	他のことをもっと楽しみたいので、思わない。
3	思わない。読んでいる時間がない。	思わない。時間がないから。
4	思わないです。古典読むよりもっと楽しいことがあるので...	読みたいとは思えなかったんですけど、でも楽しい学問だとは分かりました。古典作品が嫌なのではなく、それ以上に楽しいことがあるので読まないと思います。
5	あまり思わない。昔の書物などにあまり興味をもっていないから。	思わない。現代物の方が理解しやすいから。

次に事後アンケート質問2「今回までの授業によって古典に対するイメージは変わりましたか？簡単で構いませんので、理由も含めて教えてください」

この質問には、親しむということを表すキーワードがほとんどすべての生徒の回答に1つ以上含まれていた。

表4 親しむキーワード (事後質問2)

共感	7人
身近	6人
面白い	6人
現代に通ずる感覚	6人

事後アンケート質問3「授業で古典(古文・漢文)の考え方を現代に適用したり、現代の考え方で古典を語ったりする活動をしましたが、こうした活動を今後もしてみたいですか？理由も含めて教えてください。」

この質問にも、親しむということを表すキーワードがほとんどすべての生徒の回答に含まれていた。

表5 親しむキーワード (事後質問3)

楽しい	11人
身近	3人
つながり	3人
面白い	5人

(2) アンケートの分析

実習校の生徒たちは、先行調査の3倍程度の数が古典を好き・どちらかといえば好きと回答している。また、好き・どちらかといえば好きと回答した生徒の8割が得意・どちらかといえば得意と回答していることから、好きな理由は判然とはしないものの、受験科目である古典において、高得点が望めるから好きであると回答した可能性は捨てきれない。この姿では、生涯にわたって読みうるとは言えないであろう。このことについては、今後も引き続き調査・研究し、その実態を明らかにしてゆきたい。

・表1について

1「幅広い考えにつながると思う」、2「歴史や思想に通じる部分もある」、3「今でも共感できるような」、4「現代にはない感覚もあれば、共感できることもあって」などからは、生徒たちにとって古典がどのようなものとして捉えられているのかわかりやすい。1は古典によって自身の成長を予期し、2は人間理解に古典が

役立つと述べ、3は娯楽として古典を享受し、4は現代との共通性や差異から古典の特質を抽出しているといえるだろう。こうした見方や考え方をする生徒は生涯にわたっても「何気なく古典を読んでもいい、触れてみてもいいかなと思えるような関係」が作られたということの意味していると考えられる。

・表2について

2を表2にいった理由を説明しておきたい。本研究においては、現代語訳されたものまで含めて古典と考えている。そのため、現代語訳された文を読みたいという意見は、「読みたい」に分類されると考えた。

5に関しても「ちょっと気になる」という感覚は、古典を読んでもたり触れてみたりする感覚と近い感覚であるためこちらの表に入れた。

1は、今回目指した姿ではないが、知識として古典が使えるという視点で、2は、現代語訳されたもので、古典と現代を重ね合わせるような視点で、3は、現代の娯楽とは異なる点に、4は、話題性に、5は、おもしろさにそれぞれ興味を示すことで意見が変化した。2から言えるのは、現代語訳され、意味がわかるようになってはじめて、読んでもいいと思える生徒は多数存在するということであろう。また、3～5の意見のように読んでいたり触れていたりするときの「たのしさ」が重要であるとわかる。

・表3について

1は、自分との職業との関連から古典を読むことはないと考えている。2～4は、古典を読むよりももっと楽しいことややりたいことがあるため、古典は読まないと回答している。5は、古典との距離感から読むことに肯定的ではない。

2～4は、質問の仕方が悪かったのかもしれないが、「何気なく古典を読んでもいい、触れてみてもいいかなと思えるような関係作り」を目指していると正しく伝わっていなかったために、ここの質問も古典を「積極的に読み続けなければならない」といった意味で捉えてしまっていると考えられる。1のように職業や将来の

夢と結びつけて古典を排除してしまっている場合や5のように古典当時の感覚を想像する意欲が高まっていない場合には、本研究の実践はあまり効果がないのかもしれない。

下の図は、アンケートの自由記述欄に寄せられた意見である。この生徒は似ている科目である歴史と古典を比較し、古典に対して「文化や民によりそった内容で人間みを感じる」と評価している。この例を見ると、他教科と共存しつつ、古典の存在意義というものたちがあらわれてくるような気がしてくる。他教科との兼ね合いのなかで生徒の古典への向き合い方が変容しようということがわかり、新たな視点を与えてくれたように思われるため、掲載した。

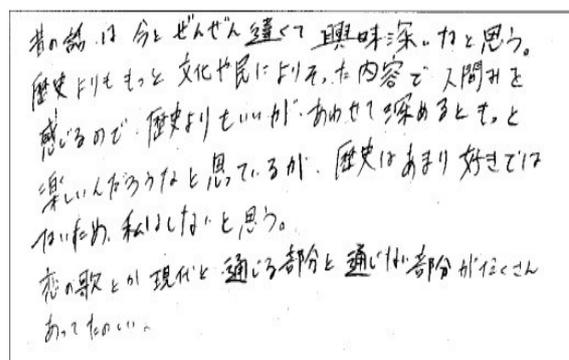


図2 他教科との比較から古典を考える生徒

4. 本研究の成果と課題

(1) 成果

授業目標①(古典の中に現代とつながる感覚を発見したり、古典の世界について現代の感覚から捉え直したりすることで親しみを深める。)に関しては、事後アンケート問2、問3の記述から達成できたと考える。目標②(平安時代の見方・感じ方・考え方を通して現代を見てみることでこれまで出会った事象に新しい側面を見出せる)、目標③(『枕草子』の作品としての理解を深める。特に清少納言は読み手の貴族を意識して、笑いを誘っていたという方向性で理解を深める)に関しては、全員が「すさまじきもの」の項目から平安時代の感覚は捉えられたと判断できたものの、現代の事象に新しい側面を見いだすということまではいけなかった

(1人だけ目標②に関することを記述していた生徒がいた。

「今までは他の言葉で表すしかなかったことも、より適切な表現ができるようになったと思う」。

(2) 本研究の課題

目標を達成させられなかった課題としては、目標②においては、古典で得た言語的な知識を応用させる有効な実践ができていなかったことがある。また、目標③について『枕草子』そのものの読みを深めるための方法が不明瞭であった点がある。例えば、授業中に口頭だけでなくプリントやスライドなどを用いて説明すれば、宮中を巻き込んだ笑いについてより深く生徒が理解できただろうか。

アンケート記述から、職業で用いるか用いないかというような人生や社会で役に立つものとして古典を価値づけると、古典との距離感が縮まっても読みたいとはならないことがわかった。さらに、いわゆる昔の感覚と通じ合った現代の感覚で物事を捉え直してみた本実践においても古典との距離感が縮まらなかった生徒がいることもわかった。

表3の1人目の記述から得られる反省は、役立つ対象として古典を見させてしまったということである。古典の良さはそれぞれの生活経験などから異なってくることはあるが、役に立つ、役に立たないといった二者択一的な価値観から見てしまうと、教訓や故事成語などといった知識を得ることを前提とした矮小化された古典との出会いにとどまってしまうであろう。

表3の5人目の記述が本研究にとって重要である。古典との距離感を縮めることで古典に親しむ素地を作ろうとした研究にもかかわらず、当該生徒においては、親しむというところまで古典との距離を縮めることができなかった。他の質問項目の記述においては、古典との距離感が縮まったとの回答は得られていたものの、もう一步距離を縮めることができなかった。より身近なものとして古典との関係を作り、

読んでもいいと思えるような実践を開発したい。

5. 来年度の研究に向けて

今年度の研究を踏まえると、来年度の研究の課題は以下のようなものになる。1つ目は、古典に親しめるような他の創作活動の開発である。2つ目は、アンケートの記述にもあったように現代語訳の問題と創作活動とを組み合わせる余地はないかということである。文語文法や古典常識といった基礎的・基本的な知識や技能を身につけさせながら古典に対しても親しみをもたせるためにはどのような実践が可能であるか、継続して考えてゆくことにしたい。

引用文献

(注1) 国立教育政策研究所 (2007) 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」 p137

(注2) 野田千裕・若杉祥太他 (2014) 「高校生の国語に対する苦手意識に関する調査研究」(『日本教育情報学会 第30回年会』138-139)

(注3) 中野貴文 (2015) 「研究と教育の架橋—専門性の行方—」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』第92巻第11号, 25-35)

(注4) 一瀬大樹 (2023) 「現代文・古典のつながりを考える『言語文化』授業研究—現古漢の「美意識」の違いに着目する—」(『山梨大学教職大学院 令和4年度 教育実践研究報告書』424-431)

(注5) 上野理 (1988) 「『枕草子』を読む『一もの』型章段—『すさまじきもの』をめぐって」(『国文学：解釈と教材の研究』33(5) 學燈社, 106-111)

謝辞

最後に、本研究を行うにあたり、ご協力いただいた実習校の先生方、生徒の皆さん、またご指導いただいた教職大学院の先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。